

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)					
抗白癬菌成分	ヒホナゾール マイコス ボールク リーム ・マイコス ボール液	抗真菌作用 ・ヒホナゾールは、皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)及び腐風菌(Malassezia furfur)に優れた抗真菌作用を有する。作用機序 ヒホナゾールは、真菌細胞に対して二元的な作用機序を有する。低濃度域では細胞膜の必須構成脂質成分であるエルゴステロールの合成を阻害し、高濃度域ではそれに加えて細胞膜のリン脂質と特異的に結合することにより膜の物性を変化させる。いずれの効果も最終的に細胞膜の構造・機能を障害し、その結果、抗真菌作用が発現される。					マイコスボールクリーム 主として接触皮膚炎(0.53%)、局所の刺激感(0.17%)、発赤・紅斑(0.21%)、そう痒(0.12%)等 0.1~5%未添(局所の刺激感、皮膚炎、発赤・紅斑、そう痒) 0.1%未添(びらん、鱗屑、亀裂) マイコスボール液 主として局所の刺激感(0.87%)、接触皮膚炎(0.47%)、発赤・紅斑(0.27%)、亀裂(0.23%)、鱗屑(0.13%)、そう痒(0.11%)等 0.1~5%未添(局所の刺激感、皮膚炎、発赤・紅斑、亀裂、鱗屑、そう痒、びらん) 0.1%未添(乾燥)			本剤の成分過敏症既往歴、著しいびらん面			・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しいびらん面には使用しない。 ・亀裂、びらん面には注意して使用する。			1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 白癬、足部白癬、股部白癬、カンジダ症、指間癬、皮膚カンジダ症、皸風
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	ヒトにヒスタミン溶液、ツベルクリン液、サワギク等のアレルギーを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、膨疹、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。					強度不明(過敏症、皮膚の発赤、腫脹、そう痒感、湿潤など)					炎症症状が強い浸出性の皮膚炎、適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。	使用部位 ・眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	本麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ	

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗ヒスタミン成分	マレイン酸クロルフェニラミン	外用薬としてなし																
鎮痒成分	クロタミトン	オイラックス	抗ヒスタミン剤、局所麻酔剤とは作用機序を異にすると考えられる。鎮痒作用				0.1～5%未満(熱感・しゃく熱感、刺激症状(ピリピリ感、ひりひり感等)、発赤、発赤増強・紅斑増悪、分泌物増加、浸潤傾向)	5%以上(過敏症:皮膚の刺激感(熱感、ひりひり感等)、接触性皮膚炎(発赤等)等)		本剤過敏症既往歴				炎症症状が強い浸出性の皮膚炎・適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。	・眼あるいは眼周囲及び粘膜には使用しない。 ・高齢者:大量又は長期にわたる広範囲の使用は避ける ・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人:大量又は長期にわたる広範囲の使用は避ける ・乳幼児・小児:広範囲の部位への使用しない。	通常、症状により適量を1日数回患部に塗布又は塗擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人:大量かつ広範囲の使用は避ける。	湿疹、尋麻疹、神経皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス	
収れん・保護成分	酸化亜鉛	酸化亜鉛	皮膚のたんぱく質と結合して被膜を形成し、収れん、消炎・保護並びに緩やかな防腐作用を現す。また、浸出液の吸収及び水分抑制により、創面又は潰瘍面などを乾燥させる。				5%以上または頻度不明(発疹、刺激感等)	5%以上または頻度不明(過敏症状)		腫瘍または広範囲の熱傷(組織修復の遅延) 患部が湿潤している場所(組織修復の遅延)				使用部位:眼には使用しない。使用時、誤って吸入しないよう注意させる。			・外用散剤(散布剤)として15～100% ・軟膏剤・液剤(懸濁剤・リメント剤・ローション剤等)として2～60% 上記濃度に調整し、いずれも症状に応じ1日1～数回患部に適用する。	軽度の皮膚病変の収れん・消炎・保護・緩和な防腐

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)					症状の悪化につながるおそれ
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン ベルカミン	感覚・求心神経繊維のNa ⁺ チャネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬である。			中枢神経・振戦・痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤過敏症既往歴	・本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質を有する患者 ・高齢者 ・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人			投与の際、ショック様症状をできるだけ避けるために、次の諸点に留意する。 表面麻酔 ・気道内表面麻酔の場合には、吸収が速いので、できるだけ少ない量で使用する。		表面麻酔 耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔。1~2%液にエビネフリンを添加したものを噴霧または塗布する。 眼科領域の麻酔。0.05~0.1%液にエビネフリンを添加したものを通常成人には1~5滴を点眼する。 尿道粘膜麻酔。0.1%液にエビネフリンを添加したものを塩酸ジブカインとして、通常成人男子10~20mg、女子3~7mgを使用する。 膀胱粘膜麻酔。0.025~0.05%液にエビネフリンを添加したものを塩酸ジブカインとして、通常成人10~20mgを使用する。 局所鎮痛には、0.025~0.05%液を適量を使用する。 ・気道内表面麻酔の場合には、吸収が速いので、できるだけ少量で使用する。	皮膚麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、歯科領域における伝達麻酔、浸潤麻酔 使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)重 篤な副作用につながるおそれ	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの 特異体質・ア レルギー等 によるもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの 特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のお それ)	症状の悪化 につながるお それ 適応対象の 症状の判別 に注意を要す る(適応を誤 るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上 限があるもの 過量使用・誤使 用のおそれ 長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化等 に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
局所麻酔成分	塩酸リドカイン 液「4%」	作用機序 塩酸リドカインは、神経膜のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。麻酔効果・作用時間 塩酸リドカインの表面・浸潤・ムシ麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。	意識障害、振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)。 ショック(頻度不明)。	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴	高齢者又は全身状態が不良 ・心刺激伝導障害(症状悪化) ・重症の肝機能障害又は腎機能障害(中毒症状の発現) ・幼児(過量投与・中毒症状の発現) ・高齢者、小児、全身状態が不良、肥満者、呼吸器疾患を有する患者で前投薬や併中に投与した鎮静薬、鎮痛薬等を使用する際	高齢者・大量又は長期にわたる広範囲の使用・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人・大量又は長期にわたる広範囲の使用・乳幼児・小児広範囲の部位への使用しない。 過量投与 徴候、症状 中枢神経系の症状、初期症状として不安、興奮、多弁、口周囲の知覚麻痺、舌のしびれ、ふらつき、聴覚過敏、耳鳴、視覚障害、振戦等があらわれる。症状が進行すると意識消失、全身痙攣があらわれ、これらの症状に伴い低酸素血症、高炭酸ガス血症が生じるおそれがある。より重篤な場合には呼吸停止を来すこともある。 心血管系の症状、血圧低下、徐脈、心筋収縮力低下、心拍出量低下、刺激伝導系の抑制、心室性頻脈及び心室細動等の心室性不整脈、循環虚脱、心停止等があらわれる。	塩酸リドカインとして、通常成人では80～200mg(2～5mL)を使用する。 なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 (使用方法) 耳鼻咽喉科領域 鼻腔内、咽喉に刺激性薬物を塗布する前処置、耳管カテーテル挿入、下甲介切除、鼻中隔矯正、扁桃切除、咽喉頭鏡検査等の場合本剤の適量(1時に5mL(塩酸リドカインとして200mg)以内)を塗布又は噴霧する。 泌尿器科領域 膀胱鏡検査、尿管カテーテル挿入、逆行性腎盂造影法、凝血除去、結石処置、経尿道式尿道乳頭腫切除等の場合4%液を倍量に希釈し、その約10mL(塩酸リドカインとして200mg)を尿道内に注入し、男子では陰茎を指挿子ではさみ、女子には綿栓を施して5～10分間、液を尿道内に貯留させる。 気管支鏡検査 全身麻酔時の挿管には本剤を倍量に希釈し、その適量(10mL(塩酸リドカインとして200mg)以内)を噴霧する。 幼児(特に3歳以下)：低用量から投与を開始(麻酔効果の把握が困難なため高用量又は頻回投与されやすい)	表面麻酔	

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を認めるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌・消毒成分	塩酸クロルヘキシジン グルコン酸塩として5%ピピテン液	抗菌作用(in vitro試験) ・グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序 作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。		ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)		・クロルヘキシジン製剤過敏症既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。) ・腫、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。) ・産婦人科用(腫・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外生殖器の消毒等) ・眼	・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴			・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・眼に入らないように注意する。(眼に入った場合は直ちによく水洗する。)	本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。効能・効果 用法・用量 (1)手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時 0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時 0.5%水溶液(30秒以上)) (2)手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) (3)皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液) (4)医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(通常時 0.1%水溶液(10~30分) 汚染時 0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時 0.5%エタノール溶液(2分以上)) (5)手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液)			

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別(適応を要する(適応を誤るおそれ))	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌・消毒成分	塩化ベンザルコニウム 0.1w/v%ブナミトール水	・本剤は使用濃度において、多芽型細菌(グラム陽性菌、グラム陰性菌)、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。 ・作用順序は、陰性荷を帯びる細菌に陽性荷を帯びる塩化ベンザルコニウムが菌体表面に吸着・集積され、青たん白を変性させ殺菌作用を示す。 ・塩化ベンザルコニウムは陽イオン界面活性剤であるので、界面張力を低下させ、清浄作用を示す。					頻度不明(過敏症)				・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。 ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用。正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。 ・深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。 ・経口投与しないこと。洗眼には使用しないこと。 ・密封包装、ギプス包装、バッグに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。	・粘着、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと(全身吸収による筋脱力を起こすおそれがある)。	効能・効果・用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度) ①手指・皮膚の消毒: 通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、その後塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で拭拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒: 手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒: 塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・拭拭するか、または噴霧する。 ⑦腫瘍洗浄: 塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。 ⑧結膜囊の洗浄・消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。 ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用: 正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。	

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重 篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく 器質性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要す る(適応を誤 るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等 に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等によ るもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等によ るもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ		
殺菌・消毒成分	フェノール	フェノール	本剤は、使用濃度においてグラム陰性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。				頻度不明(過敏症)		・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)			・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には、皮膚及び吸収され、中毒症状を起すことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起すおそれがある。] ・誤飲を避けるため、保管及び取扱いは十分注意すること。	長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)	効能・効果 用法・用量 (本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒 フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒 フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒 フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを含む) 液 フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏、フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)	

みずむし・たむし用薬

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重 篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要す る(適応を誤 るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等 に伴う使用 環境の変化	
		併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等に よるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等に よるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ				
角質溶解成分	サリチル酸	サリチル酸	サリチル酸は、抗真菌作用を有し、特にE.菌に対して1000~4000倍で発育を阻止する。また、角質溶解作用も有する。					頻度不明(発赤、紅斑等) 頻度不明(長期・大量投与時、内服、注射等全身的投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)		禁忌 本剤に対し過敏症の既往歴		・妊婦または妊娠の可能性のある婦人 ・低出生体重児、新生児、乳児、幼児または小児 ・広範囲の病巣に使用する場合	患部が化膿しているなど湿潤、び爛が著しい場合は、あらかじめ適切な処置を行った後使用する	長期間使用しても症状の改善が認められない場合は、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		・眼には使用しない。 ・副作用の発現増加	症状に応じて下記の濃度の軟膏剤、または液剤とし、1日1~2回塗布または散布する。 小児 サリチル酸として 0.1~3% 成人 サリチル酸として 2~10% なお、疣贅、鶏眼、胼胝には、通常サリチル酸として50%の絆創膏を用い、2~5日目ごとに取りかえる。	・絆創膏として 疣贅・鶏眼・胼胝の角質剥離 ・軟膏または液剤として 乾癬、白癬(頭部浅在性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、癬風、紅色斑糠疹、紅色陰癬、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手掌足底角化症(腫)、ダリエー病、遠山連環状斑糠疹)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌蹼膿疱症、ヘブラ斑糠疹、アトピー性皮膚炎、さ瘤、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患
消炎成分	グリチルレチン酸	テルマクリン軟膏	本剤の抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上あるいは頻度不明(過敏症)						眼科用として使用しない。		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎		